

## 編集を終わって

朝5時、荒川区尾久にあるデルタ造船所の台船を蹴って隅田川を漕ぎ上り、赤羽水門から荒川放水路に入って練習を重ね平井大橋に至る。総武線の平井駅に最も近い岸辺で堀内監督はコーチボートを降り出勤され、夜には合宿所に帰られデータ分析を交えてクルーと漕研を行うーこれが東京合宿での我々の毎日でした。特にローマ五輪大会を控えた昭和35年の合宿においては、100日間もの長期にわたって密着指導され、ついに本学を日本代表クルーへと導いて下さったのでした。

私は「ボート開発60年」に接して、大きな驚きの衝撃を受けました。先ず感じたことは「堀内さんはいつ寝ておられるのだろうか」ということでした。ボートの指導をしながら、我々には発想すら浮かばない、正に夢のような斬新な乗り物の数々を開発され実現してこられたのです。

その開発対象領域は海、空、陸、人間パワーの水中翼艇などあらゆる分野に広がっており、多くの人達に喜びと感動を与えてこられました。

井口和基 理学博士は「ゼロ戦の堀越二郎が“空の天才”なら、OU32号艇の堀内浩太郎は“海の天才”だ」と称えておられます。この“天才さん”は、物事への集中度合が人並み外れて速く深く、豊かな発想力と相俟って時間の高効率活用を可能にしておられるように思います。

「ボート開発60年」を読んで最も感銘を受けたことは、堀内さんの人材育成のスタンスです。堀内さんは若い技術者に対して常に「夢を形にする」ことを説いておられます。すなわち、「夢を描け、しかし夢だけに終わらせるな、夢を作品として形に作れ」ということだと思えます。「その努力によって輝かしい成功体験を味わうことが技術者の限らない自信になるし、力を合わせて物を作ることがどんなに楽しいことかを学ぶ尊い機会になる。そして会社がささやかな後押しをすると、遥かに高い活動ができ成果も上がるのである」と述べておられます。この信念こそが、盤石な社会を築いていく人材育成の根底の哲学なのであろうと感じ入りました。

私たちが堀内監督から指導を受けていた当時は「如何にして上位に這い上がるか」というだけで無我夢中で漕いでいました。やがて東京のクルーに勝つようになり、次第に力をつけていきましたが、「来年はローマ五輪の年」と聞いても、クルーにとっては遥かに遠い夢の話でした。しかし堀内監督は「夢を形にする」信念のもと、どのようにしてライバルの東大、一橋大、慶応に勝つことができるかの思考の中で「体力・経験が多少不足していても十分対抗できる」漕ぎ方として「6分を切る漕法」を提示され、見事に日本代表の栄に輝いたのです。

堀内さんは極めて人間臭い天才なのだと思えます。そこが接した人がみな惹きつけられる所以なのでしょう。これからも健康に留意されて、ますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

2014年12月

島田 恒夫

## 刊行にあたって

本講演録は巻頭にありますように、父堀内浩太郎の講演を島田恒夫さんのご尽力により纏めたものです。島田さんは、1956(昭和31)年に東北大学漕艇部に入部され、父のコーチを受けられました。以来、長いお付き合いをいただいています。

父は自分のライフワークであったローイング(漕艇)と船作りに関して多くの講演をしましたが、そのたびに時間をかけて原稿を推敲し何回も発表練習をしていました。それだけにこの講演録をたいへん気に入っており、「これならいろいろな人がよく分かって楽しんでくれると思うよ」と自賛していました。そして自分の葬儀のときには皆様にお配りしてほしい、と申しておりました。

父は2016(平成28)年1月18日、89歳の生涯を閉じました。思ったより早い逝去のため葬儀に間に合わせることは叶いませんでしたが、島田さんの編集に加えて、デザインやDVDの編集に専門家の手を借り、ここに本書を刊行いたします。本書の誕生は、島田さんの強い思いとお力によるものであり、重ねて厚く御礼を申し上げます。

生前父にご厚情を賜りました皆様に、心からの感謝をこめて本書をお届けいたします。本書の頁をたどり、またDVDをご覧いただいて、ローイングと船作りに生きた堀内浩太郎の人生を偲んでいただければ、こんなにうれしいことはありません。

2016年11月3日

堀内 哲  
井上 洋子

『講演録 楽しみの軌跡 ローイングと船作り』

発行日 ● 2016(平成28)年11月3日

著 者 ● 堀内浩太郎

編 者 ● 島田恒夫+堀内哲・石崎康子

発 行 ● 堀内哲・井上洋子

〒248-0007 鎌倉市大町1丁目19-11

装丁・デザイン ● 小谷充+平湯あつし(株)カイ

DVD編集 ● 江藤孝治

印刷・製本 ● (株)ユリクリエイト